

# “ミーマーンサー学派の聖典解釈学における linga の機能について

吉水清孝

せんじぬけ

“ミーマーンサー学派は、ヴェーダ聖典の複雑な祭式規定の統一的把握を目指して成立した学派であり、他のインド哲学諸学派とは異って、もともと存在論や認識論を論ずることなく、また解脱への志向をもたなかった。この学派の根本典籍である“ミーマーンサー・スート”（略号 MS）や、シャバラ・スヴァーハ（Śabaravāmin 五世紀）による現存最古の註釈（*Bhasya* 略号 SBh）は、全体的には、極めて煩瑣な祭式解釈学に終始していると言つても過言ではない。

派に見られたような新しく独創的な展開は、“ミーマーンサー学派には起らなかつた。その代り、数多くの綱要書が著され、哲学的諸問題の定説や、ヴェーダ聖典の解釈法が手際よく纏められるようになつた。

綱要書のうちでも、アーバデーヴァ（Ābadeva 十七世紀）の著作 *Mīmāṃsānyāyapratihāśa*（略号 MNP）は、クマーリラ系統の“ミーマーンサー学派によるヴェーダ聖典解釈法を纏めた最も代表的な綱要書であり、バースカラ（Bhaskara 年代不詳）作の *Arthasamgraha* の内容に平行した、より詳細な解説書である。しかし綱要書という性格上、アーバデーヴァは、聖典解釈のために考案された“ミーマーンサー学派独自の術語に対しても、本書の中で十分な説明を与えていない場合がある。

クマーリラは、聖典解釈を目的とした著作 *Tantravārttika* と *Tupatiča* の中で、数多くの術語を駆使しながら、第一 adhyāya 第一 pada 以降の“ミーマーンサー・スート”及びシャバラ註を、詳細に、かなり冗長に註釈しているが、アーバデーヴァは、クマーリラが術語に帰せた諸機能を暗黙裡に前提した上で、その術語を用いて聖典解釈の規範を

い。但し、“ミーマーンサー学派は、祭式を規定したヴェーダ聖典を構成する言語のもつ機能については、成立当初より重大な関心を寄せていた。

七世紀になると、バラモン哲学諸学派の通念と鋭く対立する仮想、特にディグナーガ系統の教説に刺激されて、クマーリラ（Kumarila）とプラバーカラ（Prabhakara）の二人が輩出し、インド哲学共通の哲学的問題についても、各自独自の学説を確立した。その後、両者の系統は、互いに論争を交しつつ、各々の学説を整備していくが、インドに於ける仏教の滅亡後は、ヴェーダーンタ学派やニヤーヤ学

示してみせるのである。本稿では、このよるな術語の一例として、viniyogavidhi 解釈のための解釈根拠 (pramana) の一つである linga について、*Tantravārttika* (略号 TV) を参照しつゝ、アーバデーヴァが暗黙裡に前提してゐるやの機能を探り、併せて“ミーマーンサー学派の言語觀が、煩瑣な聖典解釈法をどのように支えてくるのか、その一端を考察してみた。

viniyogavidhi とは、ヴェーダ祭式の中で用いられる要素が他のどの要素のために用いられるのが、どう適用関係 (vinyoga) を規定した、ヴェーダ聖典中の命令文 (vidhi) である。例えば、“dadhnā juhoti.” ところ viniyogavidhi は、凝乳 (dadhī) が獻供 (homa) のために用いられ、獻供に従属するもの (anga) であることを規定している。

“ミーマーンサー学派は、viniyogavidhi の規定する適用関係を決定するための解釈根拠として、sruti (明言)、linga (微詮)、vakya (文内文脈) prakarana (章内文脈)、sthāna (社置)、samakhya (原意語) とこう六種を認めている。これらはいずれも、適用関係の規定にかかるヴェーダ聖典本文の様々な構成要素、即ち単語、文章などのもつ何ら

かの語詮機能である。“dadhma juhoti”の場合には、“dadhma”的具格語尾が、凝乳が供体のための手段である。しかしして、知らしめており、六種の解釈根拠のうちの śruti は該当する。理由は後で述べるが、śruti は六種の解釈根拠のうちで最も有力なものである。回 1 の vinyogavidhi の解釈に śruti のみなみや他の解釈根拠も採用可能であり、適用関係の解釈を幾通りにも導き出せる場合にせば、śruti に依拠した解釈が最優先される。本稿で主題とする linga は、śruti に次のように一番目に有力な根拠解釈である。

ルハルダ、日本での研究者は、linga の機能をみると、それを理解して来たのだらうか。linga の機能を考察する前に、Keith も、śruti と linga の名々で、‘express declaration’ “indirect implication” として語を述べてゐる。Keith は、śruti と linga の名々で、‘direct assertion’ “indirect indication” と記している。適用関係を śruti は直接的に表す linga は間接的に表す、と言へる所であらうか。確かに “linga” と云ふ語は、推論式に於ける理由 (hetu) と同義に用ひられるからわかるが如く、それ自身のあり

かたを示すと共に、何か或る他のものもありかたをも付隨的にして語 (mark, sign, token) を意味する。しかしながら、Keith も Jha も linga がそれを直訳ではあるのようないかだをしてゐるのか、まだ linga がいかにして間接的に適用関係を表すのかといふ、何を語つてゐる。

ルハルダ、Arthasamgraha は詳細な訳註を付して出版した A.B. Gajendragadkar と R.D. Karmarkar が linga と abhidha (直訳表示能力) と回一観してゐる。

“Linga is defined as the power of words to denote something.... Power is nothing but convention. So the pramāṇa linga consists in the conventional meaning of a word, the meaning which is expressed by abhidhā.”

Arthasamgraha によると、linga が語源的意味から区別され、た、語の慣用的意味を表示する能力 (rudhi) である。ルハルダ、linga がもつてゐる種の能力であり、その mantra がどの祭式構成要素のために用いられるのかを、それに依拠して知る事が出来るものである。

一方 (a) は、A がなければ B が決して実現しなくなる「根拠」による。本稿四で語る如く、今は触れない。1 種の linga のうちの (a) は、上品の如き mantra (真言) がもつてゐる種の能力であり、その mantra がどの祭式構成要素のために用いられるのかを、それに依拠して知る事が出来るものである。

### 1. linga と mantra

linga の機能を語る 1 館の冒頭で、アーパデーヴァは、46番目、linga を「能力」 (samarthyā) と等しい、

mantra (1) : barhir devasadanam dami. 「神の座たる barhis 持を〔我は〕ぞ。」

が、草刈り (lavana) と云ふ行為を昭いかに示す能力をもつてゐる。草刈りに従属するものとなる、と述べた後で、linga も「一般的関係を知らしめる他の解釈根拠」 (sāmanyakābandhabodhakaprāṇāṇāntara) に依存するもの (a) と、それに依存しないものの (b) との 1 種に分類してある。

「語々の mantra とは、意味表示の能力に基づいて、従

かたを示すと共に、何か或る他のものもありかたをも付隨的にして語 (mark, sign, token) を意味する。しかしながら、Keith も Jha も linga がそれを直訳ではあるのようないかだをしてゐるのか、まだ linga がいかにして間接的に適用関係を表すのかといふ、何を語つてゐる。

属関係がある。……」<sup>(14)</sup>

とあり、シャバラは「*pa*da の *sūtra* の評釈に  
も、実例として *mantra* を用いてある。セントラーリ  
では、

「*linga* とは、諸々の *mantra* の *ॐ*、意味を理解せし  
めの能力である。<sup>(15)</sup>」

と明記しているのである。

すると、アーバトーヴァが *linga* も（a）も（b）の二  
種に分けたのも、A が B に従属するかしないかを知らしめる、A  
に備わった微証能力としての広義の *linga* に一種ある」と  
を示したに過ぎず、ヴォーダ聖典が規定する適用関係の解  
釈根拠としての狭義の *linga* は一種あると聞いてくるわけ  
ではないであらう。適用関係の解釈根拠としての *linga* と  
は、*mantra* がその祭式構成要素に従属するかを理解せし  
め、*mantra* に身じ備わった能力である、これがは聞え  
るだらう。

やれども、*linga* とは *mantra* がもつむのよくな機能な  
のだからか。また何故、諸々の祭式構成要素のうち、特に  
*mantra* の適用関係を解釈するため *linga* が依拠される  
のだろうか。第一の解釈根拠である *sruti* と対比して、  
考察したい。

アーバトーヴァによれば、*sruti* とは、広義には、或る  
言葉が他の言葉に依存せしむる意味を表示するいふや  
あり、*vidhātri*（命令表示）、*abhidhātri*（直接表示）、*viniyok-*  
*tri*（適用関係表示）の三種があらう。*vidhātri sruti* は、願望  
法語尾（*iti*）などの、話し手の命令意志（*śabdi bhavana*）を  
表示して、聽き手に命ぜられた行為への意欲（*arthi bhavana*）を  
惹起する動詞活用語尾によるものである。*abhidhātri*  
*sruti* は、物体なしし行為を表示する名詞や動詞の語幹に  
よるものである。そして、*viniyoktri sruti* は、聽き手  
がそれを聞いただけで適用関係が理解されるむじのもの  
である。格語尾（*vibhakti* 正確には、動詞に支配される格語尾  
*karakavibhakti*）は、これの一種であり、適用関係解釈のた

めの狭義の *sruti* となる。今後本稿では、単独の “*sruti*” や、  
狭義に、格語尾によって *viniyoktri sruti* の意味で用ひられ  
ることある。

この伝統の *sruti* の三分類法は、TV の次の二節に基づ  
いてふるい取われる。

「*abhidhātri* は *ॐ* 一種の *sruti* がある。回しへ  
*viniyoktri* は *ॐ* 別の [*sruti*] がある。また、「行為の」  
実行がそれに基づく別の *vidhātri* は、第三の [*sruti*]  
と言われる。<sup>(2)</sup>」

また、別の場の中では、クマーラは *abhidhātri sruti*  
を *ukti* へ替えてくるが、ハリド *linga* をその *ukti* の  
能力であると認めてくること注目されるだ。

「言葉の *ॐ* *ukti* の能力が *linga* である。*sruti* は、  
*vidhi* は *ukti* は *viniyoga* の三種である。*vakyā* は既に示  
された。」<sup>(23)</sup>

それ故、*linga* は *abhidhātri sruti* の表示能力である  
とするべし」とになる。

ヴォーダの命令文（*vidhi*）に於ては、行為を命ずる動詞  
語尾によって *vidhātri sruti* が、動詞語幹と名詞語幹により  
*abhidhātri sruti* が、そして動詞に支配された名詞の格語  
尾により *viniyoktri sruti* が成立してくる。TV の *viniyoktri*  
*sruti* の聽取によって、格語尾が付された名詞語幹が表示  
する意味対象が何に対してもかなる適用関係を成すか、が  
接続法語尾には、命令（*vidhi*）の能力がある。これらの  
接続法語尾には、命令（*vidhi*）の能力がある。これらの  
つか、行為を遂行する時には、人は *vidhi* に依拠  
する。<sup>(24)</sup>

これに対しても *mantra* は、*vidhi* が命ずる行為を執行す  
る最中に臨んでいたり、その行為の執行に関連した

## II. *linga*と*Abhidhātri sruti*

事物を想起せしるるとして「*तात्पुरा*」、「*मीमांसा*」、「*प्राचीना*」

等。

学派では考へられていた。<sup>(25)</sup> 従ひて *mantra* は、祭式に登場する神格・供物・祭典などのある所を明かにするのであるから、*mantra* の能力をもつて、*mantra* が *vidhi* とは別個の文である *mantra* の文中の動詞に支配されねばならず、

「*विनियोक्त्री श्रुति*」の能力をもたな。それ故、*mantra* の適用関係を規定する *viniyogavidhi* を離れて、*mantra* 本文の字句のみから、その *mantra* の適用関係を解釈しなければならぬ時には、*linga* が *mantra* を構成する語の通り直接表示能力 *abhidhatri śruti* に依拠するしかなるのである。

しかし *mantra* が構成する語がもつ *abhidhatri śruti* が、*viniyogavidhi* に於ける *viniyoktri śruti* の場合と異なり、適用関係を聽き手に直接に理解せしむわけではない。例

べば、*Agnicayaya* 祭に隸属する *vidhi* は、一つある。

*viniyogavidhi(1)* : *aindrīya garhapatyam upatishthate.*<sup>(26)</sup>  
「*एंद्रिया*神讚歌を以て、ガールハパティヤ祭火を礼拝

*viniyogavidhi* に於ける *viniyoktri śruti* の場合と異なり、

適用関係を聽き手に直接に理解せしむわけではない。例

べば、*Agnicayaya* 祭に隸属する *vidhi* は、一つある。

*viniyogavidhi(1)* : *aindrīya garhapatyam upatishthate.*<sup>(26)</sup>

「*एंद्रिया*神讚歌を以て、ガールハパティヤ祭火を礼拝

・ *mantra(2)* : *kadacana starīr asi nendra saścasi dāśuse.*

「*एंद्रिया* [汝は] かかる時にも不妊の牛に非す。  
敬虔なる者に親しみ給へ。」

「*एंद्रिया* [汝は] 〔汝は〕 かかる時にも不妊の牛に非す。  
敬虔なる者に親しみ給へ。」  
「*एंद्रिया*」の *एंद्रिया* 神讚歌がガールハパティヤ祭火のために適用される、という適用関係を表示しているが、*mantra(2)* そのまゝは、それ自身の適用関係を表示してはいる。クマーワルは両者の表示能力の違いを次のように述べてゐる。

「*kadacana starīr asi*」<sup>(27)</sup> 〔*o mantra (2)*〕に於ては、*वैद्युते* “*indra*” によって *एंद्रिया* 神が直接表示されて *स्वरूप* (*abhidhivate*) は、適用関係は表示されていないのだから、*[viniyoktri] śruti* は機能していない。何故なら

「*इ*の *śruti* が *linga* よりも有力な解釈根拠である。何故ないか、*linga* よりの場合には、適用関係を規定する *ब्रह्म* (*vinyojakah śabdah*) が、直接知覚されるものではなく、想定されるべきものであるから。」

「*इ*の *śruti* が *linga* よりも有力な解釈根拠である。何故ないか、*linga* よりの場合には、適用関係を規定する *ब्रह्म* (*vinyojakah śabdah*) が、直接知覚されるものではなく、想定されるべきものであるから。」

*mantra (2)* は、*एंद्रिया*神に呼びかけ、*इंद्रिया*神の慈悲深き本性 (*svarūpa*) を明らかにしてくるが、それだけで以て、「*इ*の *mantra* は *एंद्रिया*神の礼拝のために置かれ、*एंद्रिया*神に従属する」と確定したわけではな。<sup>(28)</sup>

しかし *क्लेश्यार्थी* が *mantra* の通り直接表示 (*abhidhāna*) の能力に基いて、*mantra* は、適用関係を結ぶための適合性 (*yogyata*) だけがなく、とも認めてこ。<sup>(29)</sup> つまり、*mantra* が *abhidhatri śruti* の能力により表示されてくる対象に対する *mantra* が従属すると確定するためには、他に何が必要なのだか。

事物を想起せしめるところ「*तात्पुरा*」、「*मीमांसा*」、「*प्राचीना*」等の語 (*語幹部*) が、*abhidhatri śruti* の能力をもつて、*mantra* の文中の動詞に支配されねばならず、*mantra* の文中の名詞格語尾は、行為を命ぜる *vidhi* の文中の動詞に支配されねばならず、*mantra* 本文の字句のみから、その *mantra* の適用関係を解釈しなければならぬ時には、*linga* が *mantra* を構成する語の通り直接表示能力 *abhidhatri śruti* に依拠するしかなるのである。

しかし *mantra* が構成する語がもつ *abhidhatri śruti* が、*viniyogavidhi* に於ける *viniyoktri śruti* の場合と異なり、適用関係を聽き手に直接に理解せしむわけではない。例 *mantra(2)* : *kadacana starīr asi nendra saścasi dāśuse.*  
「*एंद्रिया* [汝は] 〔汝は〕 かかる時にも不妊の牛に非す。  
敬虔なる者に親しみ給へ。」  
「*एंद्रिया*」の *एंद्रिया* 神讚歌がガールハパティヤ祭火のために適用される、という適用関係を表示しているが、*mantra(2)* そのまゝは、それ自身の適用関係を表示してはいる。クマーワルは両者の表示能力の違いを次のように述べてゐる。

或る *mantra* が、その中の語の *abhidhatriśruti* の能力により表示され得る対象に従属してくる、と解釈するためには、*mantra* 本文とは別に、そこから適用関係を規定した何らかの言葉がヴォーカーの中に存しなければならない。しかし、好都合な *viniyogavidhi* がヴォーカーの中に現存しないから、*viniyogavidhi(1)*の *mantra* (2)の場合の通り、*śruti* よりも解釈が、*linga* よりも解釈に反する場合しばしばある。

linga による解釈を裏付ける言葉を、別に新たに想定しなければならない。

しかしアーパテークアは、この直接知覚されない言葉をいかにして想定すべきかを具体的には語らず、viniyoga-vidhi(1)を実例として、インドラ神讃歌をインドラ神のために用いると解する linga による解釈は、ガールハパティヤ祭火のために用いると解する、直接知覚された śruti による解釈よりも、その解釈を裏付ける言葉の想定を必要とする分だけ、手間が一段余計にかかるから、前者より後者を優先すべきである、と説くのみである。<sup>(32)</sup>

しかしきターリラは、śruti 以外の解釈根拠に依拠して適用関係を決定する時には、必ず適切な śruti を想定し、その śruti によって解釈を裏付けなければならぬ、と述べる。

「おもむく śruti と同様に、linga なども自力で解釈根拠となつたならば、」<sup>(33)</sup>（即ち六種の解釈根拠に優先順位のない」と）が成立しただらう。しかしそれら (linga など) は、聖伝書と同様に、śruti の想定ところへ方法に

過程を経て完了する。

mantra(2)を聽取すれば、その中の語 “indra” のおひ

linga 語や abhidhatri śruti の能力により直接表示された mantra(2)を想起される。しかし、想起されたインドラ神への礼拝のために用いられるのだ、とふう解釈が成り立つためには、インドラ神が対格で表された、

viniyogavidhi (1') : aindryendram upatisthate.

がなければならない。JRの vidhi がなければ、mantra(2)が

インドラ神を直接表示しつゝ、ガニーダのいの章内に伝承されているはずはなく、ガニーダ聖典の無謬性が損なわれるかのやある。」<sup>(34)</sup>のよへど、viniyogavidhi(1') せ、viniyoga-vidhi(1') のよへどは現存のガニーダ中に現出されなくとも、mantra(2)がインドラ神を想起せしめるに基づく

よりて解釈根拠となるのである。何故ならば、JRでは śruti のみが唯一の「独立の」解釈根拠であるから。<sup>(34)</sup>更にターリラは、linga 等の śruti 以外の解釈根拠による適用関係の解釈を裏付けた śruti せ、arthāpatti によつて想定される、と明記してゐる。

「その「六種の解釈根拠の」うち、直接知覚により把捉された字句が適用関係を規定してゐる場合、そ〔の字句〕は、聴覚において機能してゐるので、śruti と云われる。しかるに、適用関係を規定していない字句を直接知覚によりて把握した上で、適用関係を規定してゐる〔字句〕が、arthāpatti によつて想定される場合に、linga などが「解釈根拠と」なるのである。」<sup>(35)</sup>

「おもむく śruti と同様に、linga なども自力で解釈根拠となつたならば、」<sup>(36)</sup>（即ち六種の解釈根拠に優先順位のない」と）が成立しただらう。しかしそれら (linga など) は、聖伝書と同様に、śruti の想定ところへ方法に

arthāpatti せ、A と B の間に、「A は B に依存してのみ成立し、B なしとは成立しない。」という方向性をもつ条件関係 (anyathānupapatti) が確立しており、しかも A の成立が既に何らかの知識手段によって確認されてゐる場合

viniyogavidhi(1') における “aindrya” の具格語尾と “indrāt” の対格語尾によつて viniyoktri śruti に依拠して、mantra(2)がインドラ神への礼拝のために用いられる、といつて解釈が成立するのである。<sup>(37)</sup>

しかしも、現存する viniyogavidhi(1') による解釈に相応するよへど、mantra(2)がガールハパティヤ祭火を表示してゐると解すれば、mantra (2)が、の章内に伝承されしるゝとは成り立つたま、前記の arthāpatti せ成り立たず、linga による mantra(2)の解釈は斥けられ、現存しない viniyogavidhi の想定ところへ手間を要しなじ、śruti による解釈のみが確定するのである。<sup>(38)</sup>

#### 四 prakarana による linga の総括

本稿一の初めに紹介しておいたよへど、アーパテークアは、mantra の適用関係を linga によつて解釈するためには、「一般的関係を知らしめる他の解釈根拠」が必要である、と述べた。次に、JRの「一般的関係」とは何のJRで

あり、また、*linga*」よりて適用関係を解釈する時に、何故一般的関係を理解しなければならないのか、を考えてみた。

*mantra(1)*は、新満月祭の祭壇を作るためにクシャ草の刈り取りを行つ時に唱えられるものであるが、クシャ草を刈り取ると「う行為は、何も」の *mantra* を唱へても行うことができる。しかしアーパデーヴァによれば、新満月祭の最中に行つクシャ草の刈り取りは、他の日常的な場面での刈り取りとは異なつて、新満月祭の *apurva* (祭式執行の果報をもたらす新得力) を完成するための手段なのであり、

*mantra(1)*の朗唱は、クシャ草の刈り取りを、新満月祭の *apurva* 完成手段として思ふ起させる働きをするのである。<sup>(40)</sup> ところが、*mantra(1)*の直接表示能力即ち *linga* は、単にクシャ草の刈り取りを思ふ出させるのみであり、特に新満月祭の *apurva* 完成手段となる草刈りだけを知らしめていふわけではなし。そこで、この *mantra* が表示する対象を、

この特殊な状況での草刈りべく限定するために、この *mantra* がヴェーダの新満月祭の章内で伝承されてこゆる *linga* が文脈、即ち適用関係解釈のための根拠の一いつである

「また、そうであるじふ（語やクシャ草の刈り取りが *apurva* の完成手段であるじふ）が、[*mantra(1)*の] 能力のみによつては理解されな。[*mantra(1)*]は」草刈りを明らかに示す」とのみを「表示する」能力があるのでから。それ故、必ずや、*prakarana*などか、一般的関係を知らしめるのじふで得られねばならぬ」<sup>(42)</sup>。

しかししながら、アーパデーヴァは、何故、*mantra(1)*がいかなる限定も受けじふなら「クシャ草の刈り取り」を表示するのか、という点につひては、何も説明を加えていな

じ。だが、クマーリラの所説によれば、その理由は单語の直接表示能力が普遍を表示するものである」とに求められるのである。<sup>(43)</sup>

MS 3-2-21 ~ 24 「agneyyadhikarana ([トク) 神讚歌の節]」に記述され、

*viniyogavidhi(2)*: agneyya agnidhram upatisthate.<sup>(44)</sup>

「アグニ神讚歌を以て、アーラー〔トク〕祭節を礼拝する。」

この中の、「agneyya」が表示するアグニ神讚歌がリグ・ヴ

ヒーダ全体のアグニ神讚歌のペル、*viniyogavidhi(2)*が帰属

て解釈すれば、この *vidhi* は、リグ・ヴェーダ中の全てのアグニ神讚歌を朗唱するような礼拝を命じてゐるのであり、*prakarana*による制約は、それと矛盾するのではない。」ところが反論者が説を予想して、シャバラは、両者が矛盾しない」とを主張しているが、クマーリラは、このシャバラの主張の意図を次のように解してゐる。

「前項は個物じとじ完備われじふかふ、[*Jyotiṣṭoma* 節]」帰属する個々「のアグニ神讚歌」のペル、アグニ神讚歌の普遍の」全体が成立してゐるから、[*linga* と *prakarana* との間に] 何も矛盾はない」と考へ、「ハヤバナは」述べたのである。<sup>(45)</sup>

「マーラー学派の定説では、「*gaub*」([ナ) などの单語(語幹部分)の直接の表示対象は、一群の諸個物ではなく、それら一群の個物に共通に、かつそれらのみに、各々の本來的な属性として備わつていて、同種の個物間の同一性の認識と、異種の個物間の差異性の認識の根拠となる、*prakarana* (jati, akrti, samanya) である。また、单語が普遍を直証する」*linga* によれば、反論者の *sutra* 21 によれば、反論者と定説者の立場より成る長い註疏を書いてゐる。

*prakarana* (章内文脈) によつて、あらかじめ *linga* の機能を制約しておく必要があるのである。

接表示すべきことを、動詞 abhi-<sup>50</sup> dha で以て表す<sup>(50)</sup>。

linga “が、物体や行為を表示する名詞や動詞のもつ abhidhātri śruti の能力である”ことは既に論じたが、厳密には普通名詞と動詞の語幹部分は、普遍を直接表示するものである。viniyogavidhi(2) 中の語 “āgneyya” の もの linga は、——クマーリラが「アグニ神讀歌性」と名付けた所ではないが、——個々のアグニ神讀歌に共通し、それらのみに備わった普遍を表示してくる。それ故にこそ、この語で以て、文脈に応じて、ヴューダの中の <sup>51</sup>アグニ神讀歌にも言及する”ことが出来るのである。

しかし、或る特定のアグニ神讀歌のうちにも、この普遍は欠ける所なく備わっているのだから、たゞ <sup>52</sup>prakarana によって linga を制約し、viniyogavidhi(2) が言及してこむアグニ神讀歌を Jyotiṣṭoma 祭に帰属するものだけに限定しても、語 “āgneyya” の linga がアグニ神讀歌の普遍を直接表示してこねば、否定されてしまつとはならぬ。むしろ、linga によつて、聽き手にこの普遍が理解されれば、聽き手の心には、「この場合、文脈上このアグニ神讀歌がやぶやかのだらうが」とふう、特殊化への期待も生まれるからである。<sup>(53)</sup>

#### 五、linga の機能 | 読法意証

linga の機能を論ずる締めくくつとして、アーパデーヴ

アは、mantra の もの linga は、mantra とその第一義的意味 (mukhyartha) に於て適用せしめるのであって、第一義的意味 (gaunpartha) に於てではなく、と断定<sup>(54)</sup>し、その理由を次のように述べてこむ。

「第一義的意味は、[語を聴く] 最初に浮んで来るものだから、それ（即ち第一義的意味）のみに於て適用關係の認識が完成したのに、再び第一義的意味に於て適用關係を想定するならば、過重 (gaurava) の過失に陥つてしまつからである。」<sup>(55)</sup>

それ故、mantra(1) の もの linga に依拠すれば、この mantra は、語 “barhis” の第一義的意味であるクンチャ草の刈り取りのために適用されるのであり、クンチャ草に類似してくるため “barhis” の第一義的意味となるウラバ草やラージ草の刈り取りのためにまでも適用すべきではないのである。<sup>(56)</sup>

しかし、mantra をその第一義的意味のために適用する時には、この linga による適用關係の解釈が、その

待が生れてくるのであり、この期待に応えるのが、prakarana による制約なのである。

「それ故、linga を備えた文は普遍を対象とし、prakarana が、それ（即ち普遍）によつて期待された特殊を理解せらるかむ、〔普遍が個物に〕内属する」とに矛盾はない、[prakarana も] 破るのは当然である<sup>(57)</sup>。」

アーパデーヴアが、mantra(1) の表示能力は単にクシャ草の刈り取りを明らかに示すのみであり、prakarana によつて、その表示対象を新満月祭の apūrva 完成手段となる草刈りのみに限定する必要がある、と述べたのも、「語は普遍を直接表示する」と比べ、ミーマーンサー学派の語語観を踏まえた上で、mantra(1) 中の動詞 “dami” の語幹部分は、草刈り一般に共通する普遍を直接表示する、と考えたためである<sup>(58)</sup>。

linga の機能を論ずる締めくくつとして、アーパデーヴ

mantra の適用を規定し、かつ現存する viniyogavidhi の śruti による解釈と矛盾してはならない。アーパデーヴアはハリヤーの条件を明示してはいなければ、既に、mantra(2) の適用關係を巡つて、viniyogavidhi(1) の śruti による解釈を優先させるために、インドラ神讀歌が、インドラ神ではなくガールハパティヤ祭火の礼拝のために適用されることを認めていた（本稿III）。かくて、通常はインドゥラ神を第一義的に表示してくる mantra(2) が、この場合には、第一義的に、ガールハパティヤ祭火を表示してこむことになる。

MS 第III adhyāya 第II pada の第一 adhikarana (śutra 1-2) は、mantra が原則として第一義的意味を表示する<sup>(59)</sup>ことを論じてゐるが、次の第一 adhikarana (śutra 3-4) は、その例外規定として、mantra が第一義的意味を表示する場合を扱つてゐる。II の註釈の中で、クマーリラは、mantra がその第一義的意味に対し適用されると解釈すれば、brahmā 士の viniyogavidhi と矛盾してしまつ場合には、その mantra は、第一義的意味とは別の第一義的意味に對して適用されねばならないと明記してゐる。

「brāhmaṇa と mantra の二種れかに第一義的意味〔を表示する〕」と

表示する。いふるや場合にば、そのやうの mantra の方が、〔brāhmaṇa の〕再解説であるから、第一義的意味〔を表示する〕のやうな、と認める。

“一、マーンサー学派によれば、brāhmaṇa を構成して、  
viḍhi は、他の二かなる知識手段による認識し得ない宗教的義務 (dharma) を規定してこそ。それ故、viḍhi の規定を理解するに際しては、viḍhi の寺義通りの意味を最優先しなければならない。一方 mantra は、祭式執行中に聞えられるいじめつて、祭式に関連する事物を想起せしめる働きを果すが、mantra による想起される事物は、これらがの viḍhi による規定されてくるものであり、mantra はそれを再解説 (anuvāda) であらわすものだ。

#### 緒語

「圓滿のへや」 brāhmaṇa 全く未知のものを命ぜるのやうのやうな、また「他の文の機能を必要とするやうに」最初に機能するものであるから、他に何の知識手段もた

なこ事物に関する、第一義的な意味〔を表示する〕」とは不適切である。  
しかし mantra は brāhmaṇa によって命ぜられた事物を明らかに示すものであるから、それ (即ち brāhmaṇa) に従属して機能するのである。それ故、〔mantra が、brāhmaṇa と〕矛盾する自身の第一義的な意味を捨てて、第一義的意味の認識原因となるのに適切なのである。<sup>(57)</sup>

それ故、mantra は viḍhi は従属してくるのであり、mantra がその第一義的意味のために適用されると解釈する、その mantra の適用を規定した viniyogavidhi の解釈と矛盾してしまった場合に、mantra は、viniyogavidhi は同じして何いかの対象を第一義的に表示して、それがために適用されるとみなされるべきだ。

linga (靈証) とは、名詞・動詞の語幹だまの abhidhatri

śruti が直接表示能力 (abhidha) である。Gajendragadkar と Karmarkar が立てた解釈がクマーフカの本論によつて立証された。

適用關係の解釈根拠として、mantra の適用關係をやむの mantra 本文の字句から確定せんとする、mantra に付された語の linga が依據される。  
mantra の適用關係をそれがまの linga に依つて確定するためには、linga が表示するやうにたる Linga の mantra を用ひるる二つ、經論の viniyogavidhi や、arthapatti によつて想定しなければならぬ。

linga が直接表示能力が表示する本来の対象は、同類の個物全てに共通する普遍であるから、文脈に応じて対象を適切に限定するたまに、prakarana (章内文脈) など他の解釈根拠によつて linga を制約する必要がある。  
mantra は原則として、その linga が第一義的に表示するやうのためには適用されねが、やがてある mantra の適用を規定した viniyogavidhi が矛盾しておら場合にせ、viniyogavidhi は畢竟して第一義的に表示するやうのたる

に適用せん。

(一) 本稿で用いた略号及び底本。

MNP : *Mīmāṃsāravāyapratikāśa* (F. Edgerton: *The Mīmāṃsā Nyāya Prakāśa or Apadevī*, New Haven, 1929).

MS : *Mīmāṃsāśāstra*, SB: *Sābarabhāṣya*, TV: *Tantravārtikā* (*Mīmāṃsādarśanam*, Ānandāśrama Sanskrit Series vol. 97, part 4, 1972).

TV': *Tantravārtika* (ibid. part 2, 1981).  
SV : *Ślokavārtika* (*Mīmāṃsāśākavārtikam*. Chowkhamba Sanskrit Series No.3, 1898).

AS : *Arthasamgraha* (A. B. Gajendragadkar & R.D.Karmarkar: *The Arthasamgraha of Lauṅghī Bhāskara*, Bombay, 1934, reprint Delhi 1984).

(2) MNP p.206, ll.5-6.  
(3) ibid. ll. 9-10. linga 云々の二種の體解根拠の詮論は、北川義博による。「Arthasamgraha 和詮論〔大正十四年刊〕」[大正十四年刊] 1968, pp.69-88, p.76.

(4) A.B.Keith: *The Karmā-Mīmāṃsa*, London 1921, p.89.  
(5) Gangānatha Jha: *Pūrva-Mīmāṃsa in its Sources*, Varanasi 1942, 2nd ed. 1964, p.247.  
(6) AS p.125.  
(7) ibid. p.16, 111.



- (42) tattvam ca na sāmarthyāntrad avagamyate, lavanaaprakāśanātatre sāmarthyat. ato 'vaśyam prakāsanad sāmānyasāmbandhabodhakam svikāryam. (MNP p.211, 11-17)

(43) ibid. p.211, 11-18-22.

(44) *Taitirīya Samhitā* 3-1-6-1. Ganganatha Jha (註釋) 1-6-1  
No.66,1933,reprint 1973,p.407,11)

(45) ハターナーリー 促詔物の sutra 22 < S 評釈の中や、<sup>ハ</sup> <sup>ト</sup> <sup>ハ</sup>  
prakarana 1-4-0 ～ vinyogavidihi(3)の規定する行為が  
jyotiṣṭoma 祭り屬する一般の関係を理解し、しかる  
のむじ、ハターリー vinyogavidihi 1-4-0 ～ トケリ神讀歌によ  
ふトケリー～ル祭壇の礼拝と云ふ特殊な行為を理解する  
事である。(TV p.165,II.1-17)<sup>o</sup>

(46) SBh p.161,II.1-5.

(47) 「Jの禮拝による」〔眞面目なまえ mantra 〕の (眞  
面目ケリ神讀歌の) linga やめ(ハ)が詔められねばなら  
のでありて、「ニタ・カヒーの」十章全体の個々の「ト  
ケリ神」讀歌が「詔められねばならぬる」わけでは  
ない。セレーニのいへば、「Jyotiṣṭoma 祭り」眞面目な  
mantra が用ひられる、或つは「詔められた」といはれ  
tallingavatānenopasthananenauagrahītavya na dāśatayma-  
ntravayaktih. sa ca prakṛte mantra upādyamane niravassā  
upatta bhavati. (SBh p.161,II.6-8)

(48) sāmānyasya pratiyakti samptēhpakṛtyām api vyaktau

(49) や祭火が、ヘヘルト種識論の振(シテ)ル禁(シテ)ル禁(シテ)ル  
おもてのもの (SBh p.134,II.9-16, TV p.134,II.1-3)<sup>o</sup>

(50) gaunyatvam yatra nama syat kvacid brahmānamantrayoh/  
tatrānuvādrūpatvān mantrinām gaunatesyate//  
(TV p.132,II.12-13)

(51) tatra brahmānasatyantaprapatiyatvāt prathānapravṛtties  
cāṇanyapramāṇake 'the gaunyatvam auktam.  
mantrasya tu brahmānaociditartha-prakāśanat tatpara-  
tantravṛttih/virodhinam svārtham atiya mukhyam yuktō hi  
gaunarthaminita bhavat. (ibid.p.132,II.16-p.133,II.2)

讃歌の表示する第一義的意味と解釈  
134, ll. 9-16, TV p.134, ll.1-3.)<sup>9</sup>  
a syat kvacit brahmanantrayoh/  
antranān gauṇatesyate//